

寄稿文

動物たちの移・食・住

帯広畜産大学 畜産生命科学研究部門

柳川 久 教授

私に関わる「野生動物管理学」という学問は、「人間」と「野生動物」がより良い関係で共存してゆくためには、どうすれば良いのかを模索するための学問だと思っている。家畜やペットと違い、本来であれば人間と独立して生きているはずの野生動物であるが、現実問題として両者の間には多くの軋轢や衝突が生じている。それらの軋轢などを、どうすれば減らしたり無くしたりする事ができるのかを考えるのも、私たちの仕事（研究）の一つである。

野生動物との間に生じる軋轢の一つに、人間の開発行為による生息地の消失や減少、分断化・断片化などがある。さて、具体的にこの問題をどう解決するか？まずは、その場所にどんな動物が生息しているかを、調べる事から始まるだろう。そして保全の対象となる種類がいることが判った場合に、対策が検討される。

ここで大切なのは、その動物が「なぜ、なんのためにその場所にいるのか」を知る事だと思う。そこを通過のための径路として使ったのか（移）、そこで餌をとっていたのか（食）、そこに住んでいたのか（住）？といった具合に、その動物の生きる基本である移食住の、どの部分がある場所で求められているのかを探る事になる。ちなみに、「食」と「住」は人間と一緒にあるが、衣装が自前の動物の場合、「衣」は「衣」ではなく、移動径路の「移」である。そして、その目的がある程度判ったら、つぎにその場所のどんな資源をどの程度利用していたか？を可能な範囲で調べてみる。そして最後に、開発によってその資源がどれだけ失われるかが判れば、どのような保全対策が有効か、自ずと明らかになってくる。

例えば、以前に開発工営社の方と関わったケースとして、コウモリ類の移動径路を代替え措置（ミティゲーション）により確保した事がある。十勝地方の高規格幹線道路が防風林を横断する現場で、防風林のコウモリ相調査を行った。林の幅が約 55-70m の帯状の林で、植生もカラマツやカシワなどの単純な林であるにも関わらず、10 種類以上のコウモリ類が記録された。さて、これらの多様なコウモリ類はこの防風林を何のために利用していたのであろうか？

確認されたコウモリ類のほとんどが森林性であったが、先にも述べたようにカラマツなどの単純な林で、彼らが巣として好むような樹洞はほとんど存在していなかったため、多くのコウモリ類が定住しているとは到底思えなかった。それでは、餌場としてはどうだろうか？これも適している場所とは思えない。林内に彼らが好んで餌場とする溜まり水や緩やかな流れの水域は存在しない。バットディテクター（コウモリ探知機）で調査しても、彼らが採餌のときに発するバズ音がほとんど聞かれなかった。結論として、ほとんどのコウモリ類はこの林を通路（移動径路）として使っているのだろう、ということになった。

そうなれば、コウモリ類の移動を妨げないように、径路を確保する事を考えれば良い。だがしかし、高規格道路なので地上数 m の盛土で防風林を遮断する事になる。そこで考えたのが、たぶん世界でも類を見ないコウモリ専用通路としてのカルバートである。おまけに休憩場所としてのバットボックス（コウモリ用巣箱）も備え付けてもらった。幸いな事に、モニタリングの結果、このカルバートはコウモリ類の通路として十分に機能しているようで、記録されたほとんどの種類がかなりの高頻度で利用していた。バットボックスも何種類かによって休息用に利用され、一例だけであるが繁殖コロニーとして使われた事もある。

そのほかにも高規格道路の別の場所では、コウモリ類の餌場の代替えとして人工池が掘られた場所もあるし、繁殖用の樹洞を保全するために伐採面積を縮小したり、代替えの巣としてのバットボックスが架設された場合もある。また別の動物用の移動径路としてエゾモモンガ用の移動径路が作られた例もある。そのいずれもがそれぞれ効果を発揮しており、現在もそのような施設が対象種と目的を変えながら、新たな工夫を加えて作られ続けている。